

A Search for Factors to Promote Classroom Interaction in EFL Teaching: Through a Comparison between Team Teaching and Solo Teaching at Junior High School

教科・領域教育専攻

言語系（英語）コース

秦 慶樹

指導教官 伊東 治己

1. はじめに

英語でコミュニケーションをすることは、今まで以上に社会で生きていく上でのサバイバル・スキルになることは、否めない事実である。英語教育を志す人間として、このような需要の高まりは嬉しいことである。その反面、筆者が中学校、高校時代に受けてきた英語の授業を通して言語構造の理解を深め言語感覚を豊かにする文法訳読式の授業では、コミュニケーション能力を育成することは、難しい印象を受ける。近年の英語教育の授業では、実践的コミュニケーション能力の育成が叫ばれている。しかしながら、今尚、現場では文法訳読式の授業が幅を利かせている。

英語教師は、英語そのものを教えることだけに重点を置くのではなく、教師の言動が生徒にどのように影響を与え、その結果に対してどのように関わりをもつかということにも関心をもたなければならない。子どもたちに、知識だけを注入するのではなく、生きてゆくために大切な何かを伝えたり、学ばせることが必要である。附属養護学校で垣間見た、教師と生徒の真剣な関わりこそ教育の原点であると考えている。英語の授業においても、生徒と教師の関わりが必要になってくるのではないか。

その種の関わり合いを主眼とした学習を行なうには、インターラクシオンが必要不可欠になる。英語の授業で、生徒同士あるいは生徒と教師の間のインターラクシオンを増やすことが、英語教師の大きな使命になる。しかし現実には、日本人教師が一人で行う授業（以下、ST とする）でクラスルームインターラクシオン（以下、CI とする）を促すことは難しい印象を受ける。その一方で、ALT と日本人教師が共に行うティームティーチング（以下、TT とする）の授業を参観してみると、授業が活気に満ちていて、CI の機会が多く存在しているような印象を受ける。TT での授業の中に、CI を増やすヒントがあると考えた。そこで、日本人教師による ST の授業と ALT と日本人教師が共同して行う TT の授業を、質的・量的な側面から比較分析し、CI に関してどこに違いがあるのかを調べることにした。TT の授業から抽出した要因を、日本人教師による ST の授業にもおそらく適応可能な要因があると仮定したからである。

2. 概要

第一に、過去の EFL の歴史の中でインターラクシオンについての研究を明らかにするために、まず、第一段階では、過去に行なわれてきた外国語教育に関するインターラクシ

ョンについての先行文献の研究を行なった。先行文献の研究を通して明らかになったことは、研究者によってインターアクションの定義が異なることであった。本研究では、インターアクションを、Acquisition (以下、習得)、Communication (以下、コミュニケーション)、Education (以下、教育) の三つの観点から捉えた。習得の観点からインターアクションを捉えている研究者は、インターアクションを通して言語学習がいかに促進されるのかということに研究の視点を定めていることが分かった。コミュニケーションの観点からインターアクションを捉えている研究者は、インターアクションを通して学習者による言語使用がいかに促進させるのかという点に関心をもっていることが分かった。教育の立場からインターアクションを捉えている研究者は、インターアクションが、学習者と他者との人間的な関わり合いをいかに促進するのかという点に研究の焦点を当てていることが分かった。本研究では、これら三つの観点の中でコミュニケーションと教育の観点を融合したインターアクションを理想のインターアクションと位置づけた。

第二に、CI を分析するための視点を検討した。本研究では、過去に提示されてきた視点を参考にしながらも、独自にインターアクションを分析するための新しい視点を設けた。特に、発話者の自己との関わり合いに焦点を当てた。その際に、インターアクションにおける自己との関わりを明確な基準をもって研究している文献を見つけることができなかった。そこで、英語授業における活動に関して、自己との関わりについて定義されているものを参考にして分析視点を定めた。

第三に、第二段階で構築したインターラク

ションの分析視点をを用いて、実際に二つの中学校で行なわれた四つの授業を分析した。この調査の目的は、CI を量的・質的な観点から分析し、その実態を明確に把握することと、ST よりも TT の方が CI の機会が多くなるかを検証することであった。調査の結果、A 中学校では、ST よりも TT の授業の方が顕著に CI が多かった。B 中学校でも、顕著とまではいかないが、ST の授業よりも TT の授業の方が CI が多かった。しかも、両中学校の TT の授業では、本研究の中心課題である自己との関わりのあるコミュニカティブでかつ教育的なインターアクションが多く見られた。このような CI を誘発した要因として、三つ考えられる。一点目は、生徒の身近な題材が使われたこと。二点目は、教師の発話の多くが Referential questions であったこと。三点目は、TT の授業は、より学習者主導型の授業であったことが挙げられる。

3. おわりに

上記の三要因は、工夫次第で日本人教師による ST の授業にも適応可能であると信じる。この点は、自分自身が教壇に立って研究をしていきたい。

本研究は中学一年生と二年生を対象に行なったものであり、高学年の学習者についても同様の結果がもたらされるかという点は立証していない。また、本研究は、わずか二校での四つの授業を対象としており一般化することは難しい。さらに、少人数クラスでのデータ収集であったため、正規の四十人クラスの授業でも同じような結果が得られるかは明らかではない。さらに、TT の授業を頻繁に行なっている学校とさほど行なって学校では、CI に明らかな差異が生じる可能性もある。これらは今後の課題としたい。